

# 提言 2022

## 未来開く雑草型人間を

### 大学に求められる人材育成

岡山県立大学長 沖 陽子氏

最近、「人材育成」という言葉が頻りに登場します。人材を定義すると、「才能があり、役に立つ人。有能な人物」(デジタル大辞泉)。従って人材育成とは、将来のために有用な人物、専門的な知識を持った人物を育てることです。その中心的役割を担うのが高等教育機関である「大学」です。



おき・ようこ 1951年神戸市生まれ。京都大大学院農学研究所博士課程単位取得退学。岡山大大学院環境生命科学研究科教授、同大環境理工学部長、同大副学長・付属図書館長、岡山県立大副学長など歴任し、2019年から現職。農学博士。中国・四国雑草研究会会長、児島湖流域エコウェア会長、おかやま環境ネットワーク代表理事を務める。

機能の再定義が必要です。大学はゴールではなく、キャリアパス(職務経歴)の一部と捉え、教育システムを大きく転換する時期を迎えています。これまでのように、人材育成を一つの機関だけで対応する社会情勢ではないことは誰もが認めるところです。そこで、産官学連携の人材育成が期待されていますが、異なる組織が協働で取り組むには工夫が必要です。

では、未来に活躍する人材は、どのような資質を身につければよいのでしょうか？  
本年5月に、文部科学省は「教育未来創造会議」において、「我が国の未来をけん引する大学等と社会の在り方について(第一次提言)」を取りまとめました。この提言では、目指したい人材育成の在り方を示唆しており、予測不可能な時代に必要な文理の壁を越えた普遍的知識・能力を備えた人材、デジタル・人工知能・グリーン(脱炭素化)など科学技術

や地域振興の成長分野をけん引する高度専門人材の育成をうたっています。このほか、一つまたは複数の専門性を持ち、それをつなぐリベラルアーツ(教養)的要素を有する「T型人材」「π型人材」の育成も模索されています。もっとも、育成される側の学生たちが、このような人材像をどう理解しているのか気になるところです。

本学では、2020年度文科省「大学による地方創生人材教育プログラム構築事業(COC+R)」に「吉備の杜」創造戦略プロジェクト」が採択され、「雑草型人材」の育成を目指しています。雑草型人材とは、「雑草魂」という言葉で表される粘り強さやしぶとさのイメージだけでなく、雑草のごとく、変化する環境への柔軟性と適応力を持ち合わせ

た人材を意味しています。すなわち、予測不可能で急速な変化が生じる社会において、多種多様な環境圧をバネにする未来型思考と地域力を有した人材像です。本プロジェクトは、高い専門性と幅広い人間力に立脚した地方創生を担うたい人材を輩出するために、大学群、地方公共団体、企業等が連携・協働し、地域が必要とする産業人材を一体となって教育し、地域活性化につながることを目標としています。このため、教育プログラムには論理的思考力や、自分で課題を見つけ、答えを出していく「別解力」が身につく授業も組み込んでいます。学生たちは具体的なメニューの中で資質・能力のみならず「感性」と「好奇心」のマインドも会得できます。

これからの大学は、決して画一的な人材を生み出すことがないように、人材育成の環境を整備しなければなりません。大学の教育は未来を学ぶことです。「未来」を切り開く個性的な雑草型人間を育成するのも大学の役割です。

山陽新聞社提供

掲載の記事・写真及び、図版の無断転記を禁じます。